

人びとが創るもうひとつのアジア

# ハリーナ

HALINA

no.37 2017年8月

【特集】

**マスコバド糖30周年。**

これまでとこれから



百姓 オブ ザ ワールド  
SMALL FARMERS OF THE WORLD.

01

フィリピン・ネグロス島 バイス村  
ジョナン・ベントウラさん(29歳)  
Jonan Ventura

【写真・文】  
寺田 俊 / たらだ・しゅん  
APLA事務局

カネシゲファーム・ルーラルキャンパス (KF-RC) の卒業生 (第3期生、2013年卒) でもあるジョナン・ベントウラさん。毎年KF-RCにやってくる研修生のよき先輩、よき目標でもあり、みんなから慕われています。

「毎日5時～6時には起きて、薪で火を起こしてコーヒーを淹れ、朝食の準備をします。食事を済ませたら、鶏と豚に餌をあげて、お弁当を持って畑に出かけます。畑までは歩いて約1時間。バナナ、カボチャ、インゲン、トウガラシ、ココナツ、コーヒーなど約10種類の野菜を栽培していて、水田もあります。一通りの畑作業に、剪定も兼ねて畑の周りに生えている木を切って料理用の薪として家に持って帰ります。だいたい午後3時～4時には家に帰ってきます。そして家畜に餌をあげたり、豚舎の掃除をしたりして1日が終わります。

毎週月曜日には、村の生産物をトラックいっぱい積んで、街に売りに行きます。バランゴンバナナはオルタートレード・フィリピン社 (ATPI) を通して日本にも送っています。

昔はこんなにまじめに働いていませんでした。時間さえあれば外へ遊びに行き、お酒もしょっちゅう飲んでいました。実は最近結婚しまして、更に頑張らなくていいよ！と思うようになりました。たまにお米がなくなってしまう時があります。畑を大きくして、収入を増やしたいです。そしてちゃんとした家を建てて、生活に困らない暮らしをすることが今の目標です。毎日頑張らなくて少しずつよくなっていきます。今でもお酒は飲みますが、少しだけです」。



「二見、同じことの繰り返しに感じられたとしても、時の流れは一方行であり生物をはじめとして万物には終わりが定められているという原則からすれば、

「一見、同じことの繰り返しに感じられたとしても、時の流れは一方行であり生物をはじめとして万物には終わりが定められているという原則からすれば、

「一見、同じことの繰り返しに感じられたとしても、時の流れは一方行であり生物をはじめとして万物には終わりが定められているという原則からすれば、

RELAY ESSAY ぽこぽこ poco-poco ..... 37

僕の毎日の幸せ。

田中利昌 / たなか・としまさ  
TRiM.代表、APLAウェブサイト担当



「まったくその通りなのです。しかし、私たちは「退屈」という言葉を知っています。これはどうしたことでしょうか？ 2つと同じ物事は存在しないと私たちはわかっていきます。すべてに感動し、そして感謝できるはずなんです。でも、やはり退屈するのです」。

このような問答を繰り返しているうちに僕の食器洗いは終わっている。

次の任務は風呂洗いである。これも妻との約束で毎日毎日である。

一昨年、子どもを授かった。

彼女の振る舞いは常にこちらの想像の枠を遊々と突き抜ける。同時に凄まじいスピードで変化していく。

みるみる、さつきまでできなかったことができるようになっていく。

彼女は退屈を知らないようだ。そればかりか周囲の人間から退屈を根こそぎ奪い続ける。

おかげで、僕の体の中に、日々のあらゆるものが彼女の糧になっているような実感が湧き上がっている。

夕飯後は彼女を風呂に入れる。彼女を風呂に入れるのは、妻との約束であり僕の毎日の幸せである。

Contents

02 【ぽこぽこ 37】  
僕の毎日の幸せ。◎田中利昌

03 【百姓 オブ ザ ワールド 01】  
フィリピン・ネグロス島 バイス村  
ジョナン・ベントウラさん  
【写真・文】寺田 俊

04 【特集】  
マスコバド糖30周年。  
これまでとこれから  
国際協力から「ほんものの食」運動へ  
◎小林和夫  
砂糖の島・ネグロス島と喜界島が出会った  
◎義村浩司  
マスコバド糖生産者の自立への旅路  
—ダマ農園の場合◎幕田恵美子  
【スタッフが出る出張おぼれ話】  
ジョネルの恋人探し!?◎寺田 俊  
【インタビュー】  
アーネル・リガホンさん  
—マスコバド糖品質改善の歩み

11 【COLUMN】  
【百姓の100章の】  
「家族農 たとえ小さく見ゆるとも  
世界の未来 今ここにある」  
—農的ワークライフバランス「新しい家族農」の可能性  
◎斎藤博嗣&裕子  
【続 Have you ever seen the cinema ⑦】  
【百円の恋】◎重政栄一郎

12 【Topics】  
01 東日本土壌汚染マップと私たちが向き合うべきこと◎石丸偉丈  
02 地域の資源や元来の知恵を生かすことから◎エゴ・レモス

14 【Voice from APLA partners】  
From East Timor  
エゴ・レモスさん、愛和小学校を訪問  
From Nihonmatsu, Fukushima  
二本松有機農業研究会  
ソーラーシェアリングの取り組み進捗報告

15 事務局だより

16 【KITCHEN APLA】  
塩きんぴら—塩メレンゲをのせて  
◎按田優子

表紙のことば

1997年10月2日(この日はガンジーの誕生日でインドの祝日)インド独立50周年記念に招かれた自然農法家・福岡正信さんと同行した時に、式典会場になったムンバイにある海沿いの博物館で見つけた「ろうけつ染め」の布です。

石けんやお香の日用品、お土産というより普段の生活で使う器などが所狭しと並び、女性の手仕事による品々が集められたショップの中で心惹かれたのがこの布。

インドでは様々な場面で布が登場します。四隅を枝に結んで日よけにしたり、地べたや浜辺に広げてバナナや手作り木工品を並べればたちまちお店になります。

布一枚にどれだけの綿花が使われ、どれほどの人が関わっているのでしょうか。綿の種が蒔かれ、育ち、はじけた実を摘む。綿繰りして種を取り除き、糸紡ぎ、機織り…。ガンジーが「自分の手で紡げ」と言った意味。自然と共にある時間とこの手足でできること。私たち一反百姓「じねん道」は、ファーマーズマーケットなどに展示する時は必ずこの布を広げます。(斎藤裕子)

# 砂糖

糖は甘い。

それで儲ける者にとつてはさらに甘い。

しかし、それを作らされる者にとつてはあまりにも苦い。

——日本ネグロス・キャンパーン委員会(JCNC)制作(1999年)「ビデオ「苦い砂糖の島」冒頭より」(※)

フィリピン中部に位置し、「フィリピンの砂糖壺」と呼ばれるネグロス島は、19世紀半ばにアシエンダという大規模なサトウキビ農園が形成されて以来、今日までフィリピン全体の砂糖生産量の半分以上を産出している。1980年代半ば、「砂糖危機(Sugar Crisis)」と呼ばれる経済危機が起こり、多くの子どもが飢餓によって命を落とした。砂糖危機を引き起こした直接的な原因は、砂糖の国際価格の暴落だが、そもそもは輸出用サトウキビのモノカルチャー経済を強いられたいという構造的な問題が背景にあった。しかも、一部の大地主が広大なサトウキビ農園を所有し、多くの人びとが土地なし農園労働者であったことが飢餓をいっそう深刻化させた。この飢餓が人災と言われる所以である。

## マスコバド糖の民衆交易、30年の到達点

緊急救援を目的に発足した市民団体、日本ネグロス・キャンパーン委員会(JCNC)、APLAの前身)は、土地を含む食料 ASEAN加盟国の一つ、タイは世界で4番目の砂糖生産量を誇り、輸出に関してはブラジルに次いで世界第2位となっている(2015年)。2015年を前にして、安価なタイ産砂糖がフィリピン市場を席巻し、ネグロスは「第2の砂糖危機」にさらされる恐れがあるのではないかという不安が高まった。実際には、タイ産砂糖は、買い付け価格がより高いインドネシアや中国、ミャンマー、日本などに輸出され、現時点ではフィリピン砂糖産業界への影響はほとんど見られない。

## 砂糖に取って代わる HFCSSがもたらす問題

2017年3月、バコロド市にあるコカ・コーラ工場の前に約6000人が集まり、甘味料としてコーンシロップから作ったHFCSS(高フルクトース・コーンシロップ、異性化糖の一種)のみを使うことに対して、抗議の声をあげた(因みに、ペプシコーラはHFCSSと砂糖両方を使用)。HFCSS輸入に反対する団体によると、2010年以降、フィリピンでは約30万トンのHFCSSを輸入し、そのため、地元産の砂糖は115万トンの需要を失い、320億ペソ(約704億円)の損失を被ったと発表している。とりわけ、2016(2017穀物年度)の期間中、HFCSS輸入は砂糖価格の急落を引き起こした。2016年9月には50キロ当たり1800ペソ(約4000円)以上の価格だった

の生産手段、さらに流通、販売、金融手段までが一部の者に独占されていることを知り、食料の自給自足を達成し、独自の市場を確保することなしにネグロスの人びとの自立はないことを痛感した。マスコバド糖の民衆交易は、草の根の民衆経済をつくることから構想された。そもそものきっかけは、1986年10月に消費者団体のネットワークづくりをめざして開催されたイベント、「ばななぼうと」にネグロスのNGO代表が乗船し、日本の消費者にマスコバド糖の直接購入を呼び掛けたことだ。このアピールを受けて、「ばななぼうと」に参加していた4団体を取り組みを決め、1987年3月、10トンのマスコバド糖が初めて神戸港に陸

## 国際協力から

## 「ほんものの食」運動へ

小林和夫 / こばやし・かずお  
(株)オルター・トレード・ジャパン広報本部

揚げされた。日本とネグロスの連帯運動から始まったマスコバド糖の民衆交易だが、その後、市場は国内外に拡大する。現在(2016年度)、最大の輸出先はドイツ、韓国、フランス、スイス、そして日本である(日本のシェアは9%)。かつては見向きもされなかったフィリピン国内でも、17.6%程度のシェアを占めるまでに成長している。この要因として、マスコバド糖用サトウキビを生産する農地268.99haのうち、206.09haが有機認証を、またそのうち184.52haがフェアトレード認証を取得したことが大きい。2016年現在、10の生産者協同組合(メンバー377人)がマスコバド糖用のサトウキビを栽培している。フィリピン政府の包括的農地改革法(CARRL)によって農地を獲得し、サトウキビ生産を共同管理している組合員の暮らしは確実に改善されてきた。ダム農園はその一例である(9頁参照)。生産資金や

技術、経営能力の欠落のため、農地改革でせっかく手にした農地を手放す元労働者が多いなかで、マスコバド糖の民衆交易は、数少ない成功した自立モデルとしてフィリピンでは広く認知されている。

## 砂糖危機の再来? 自由貿易の波紋

砂糖危機から30年、ネグロスの砂糖産業を取り巻く環境はどうなっているのだろうか。ネグロスでは、数年前に「2015年問題」が話題となった。1993年、東南アジア諸国連合(ASEAN)は、域内で生産された全ての産品にかかる関税障壁や非関税障壁を取り除き、域内の貿易の自由化と活性化をめざしたASEAN自由貿易協定(AFTA)を制定した。この協定に則って、2010年、フィリピンを含む先行加盟国6カ国では域内関税がほぼゼロに引き下げられた。砂糖については、2009年に50%だった関税が段階的に引き下げられ、2015年1月に最終税率となる5%になった。



## 特集

# マスコバド糖30周年。これまでとこれから

マスコバド糖が日本に初めて届いたのは1987年3月。それから30年が経ちました。人びとの想いが、太陽と大地の恵みが、旨みと香りがぎゅぎゅとつまったマスコバド糖。これまでの歩みを振り返るとともに、これからの時代にマスコバド糖が持つ意味を考えたいと思います。

ネグロス島のサトウキビ農園にて。カンラオン山を背景に。



2017年3月20日コカ・コーラ工場前のデモ「HFCSはいらない！」。

### 異性化糖と健康被害

砂糖が、2017年3月には1300ペソ(約2800円)まで下落してしまった。清涼飲料水メーカーは国産砂糖の約40%を使用している最大の顧客であり、怒りの矛先がコカ・コーラ社に向かった形だ。1980年代半ばの砂糖危機の要因の一つが、異性化糖(当時は人工甘味料と表現されていた)の普及による国際市場の砂糖価格の下落であった。現在フィリピンでは、サトウキビ生産者6万5000人、サトウキビ農園労働者70万人、そして製糖工場労働者1万4000人が砂糖産業に従事し、家族を含む約500万人の生計手段となっている。HFCSの普及は、彼らの生活基盤を直接脅かすことにつながる。しかし、考えるべき課題は、2015年問題にせよ、HFCS輸入反対にせよ、いまだにサトウキビのモノクロップ(単作)という産業構造から脱却できていないネグロス経済の脆弱性であろう。

である。異性化糖を製造する技術は、1960年代後半、サツマイモ等を原料として日本で開発された。アメリカでも、キューバ革命で砂糖が入手しづらくなつた対策として、清涼飲料水メーカーがこの技術に注目し、コーンスターチから作る異性化糖が1970年代から急速に普及した。異性化糖は砂糖に比べて安価(約7割)で、冷たくすると甘さが砂糖より強く感じられるため、清涼飲料水をはじめアイスクリーム、シリアル、ジャム、パンやドレッシングなど広範に使われるようになっていった。しかし、異性化糖は糖尿病や肥満、心臓病の原因と考えられている。しかも、1996年、遺伝子組み換えトウモロコシの商業栽培が始まってから、HFCSの原料となるコーンシロップはほとんどが遺伝子組み換えトウモロコシになっている。これに含まれているBt毒素は腸の失調、自閉症、認知症、心臓病やガンなどの原因となる可能性が指摘されている。

異性化糖の問題には、フィリピンも日本もない。なぜなら、日本でも異性化糖は多くの食品に使用されているからである。スーパーの棚には、異性化糖が含まれている清涼飲料水、スポーツドリンク、乳酸菌飲料、果汁飲料(果汁100%を除く)などのドリンク類、菓子・パンやまんじゅうなど、とりわけ若者や子どもがよく食べる食品に多く使われているのが懸念される。甘味料に占める異性化糖の割合は、健康被害との関連である。果糖の含有量によって「果糖ブドウ糖液糖」や「ブドウ糖果糖液糖」と呼ばれる異性化糖は、工業的に作られた糖



the BOX 買付け風景。

## 砂糖の島・ネグロス島と喜界島が出会った

義村浩司 / よしむら・ひろし  
 ㈱オルター・トレード・ジャパン事業支援本部

2017年3月、フィリピンネグロス島のマスコバド糖の製糖工場(ATMC)のアーネル・リガホン(愛称ステイブ、10頁にインタビューがあります)さんと技術者のフランシスコ・モスクエラ(愛称アイク)さんが奄美大島群島のひとつ喜界島を訪問しました。

喜界島は「砂糖の島」と呼ばれ、サトウキビの栽培と製糖業が島の主要産業となっており、ネグロスの風景のように一面にサトウキビ畑が広がっています。かつて支配者により砂糖の栽培が強制されてきた歴史も併せて、マスコバド糖の産地であるフィリピンのネ

グロスとの共通点も多い喜界島で、ネグロスの人びとの交流が深まりました。

### 製造技術の向上をめざして

2016年10月、マスコバド糖の民衆取引に取り組む生協のひとつであるグリーンコープの引き合わせで、喜界島の製糖工場で働く島村克広さんや鹿児島島の製糖機械メーカーの技術者の皆さんがサトウキビの搾汁率の改善をはじめ、製造技術の向上のためにネグロスにあるマスコバド糖製糖工場を訪問しました。それを受けて、今回のネグ



### 喜界島

合は、ここ数年30%近くを占めている。80年代に砂糖危機の一因となった異性化糖は、30年たった今、ネグロスを始め、フィリピンで砂糖産業に従事する人びととその家族の暮らしを脅かす「第2の砂糖危機」にもなりかねない。そして、環境を破壊して作られる遺伝子組み換えトウモロコシを原料としたHFCSは国境を越えて人びとに健康被害をもたらそうとしている。こうしたグローバルな負の連鎖を、私たちはどうしたら止めることができるのだろうか。

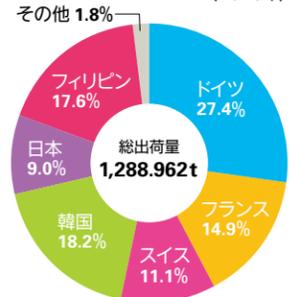
### 新しいチャレンジ

近年、経済成長が目覚ましいフィリピンでは、都市住民のライフスタイルや食習慣も大きく変化している。ネグロス島最大の都市であるバコロド市では、街中や郊外に大規模なショッピング・センターが続々と出現している。24時間営業のコンビニエンス・ストアも急速に増えた。かつては地元の農産物が安価に入手できると人気があった公共市場は寂れ、代わってきれいで見栄えのよい食材をショッピング・センターで購入する消費者が増えている。ここで販売されているのは、大手のアグリビジネスや食品メーカーが扱うさまざまな加工品や冷凍品、輸入食材が中心である。こうした消費行動の変化は地元の小農民の生計を圧迫し、消費者の健康を脅かす恐れが高い。

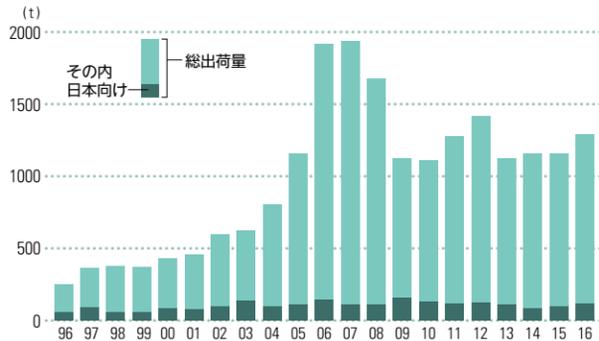
こうした生産者や消費者を取り巻く現れる仕組みだ。これにより、生産者は安定した販売先が確保でき、消費者は地産の素性のわかった安全・安心な農産物を手にすることができる。登録者はまだ100余名、規模は小さいが、日本で生協などの消費者グループや有機農家グループらが長年取り組んできた産消提携、地産地消の実践が、ネグロス連帯から30年にしてようやく始まりつつある。

組織再編に伴い、ATPIは「リアルフード」、すなわち「ほんものの食」運動の推進という新しいミッション(使命)を掲げた。サトウキビを絞ったジュースを煮詰めただけのマスコバド糖は、まさに「リアルフード」である。ミネラル分に富み、コクのある味わいが、日本でも長年多くの消費者に愛用されてきた。一方、化学的に合成されてきた異性化糖はその対極にある「フェイクフード(にせものの食)」である。国境を越えて、また、それぞれが暮らす地域で「ほんものの食」を生産し、選び、消費する運動を進めること。私たちは、これから30年の出発点に今、立っている。

マスコバド糖販売先の国別割合 (2016年)



マスコバド糖出荷量の推移 (1996~2016年)



状に抗して、オルター・トレード社(ATC)はオルター・トレード・フィリピン社(ATPI)に再編され、これまでのマスコバド糖とバランゴンバナナの輸出事業に加えて、フィリピン国内で食べもの小売り事業に乗り出す方針を打ち出した。マスコバド糖用サトウキビやバランゴンバナナの産地では、作物の多様化、家畜を組み入れた有機複合農業、自前の食品

### 砂糖の島・喜界島

喜界島は、鹿児島市からは南南西に380km、奄美大島の東方22kmに位置する、面積56・9km<sup>2</sup>の隆起珊瑚礁でできた平坦な島で、総面積の23・4%がサトウキビ畑で占められています。日本のサトウキビ生産量の約40%は鹿児島県の奄美群島と種子島で生産されていますが、喜界島はその15%に当たる約7万5000トンのサトウキビを生産しています。

鹿児島県では、製糖工場の1島1社(徳之島のみ2工場)の体制がしかれており、島で収穫されたサトウキビの98%以上が大規模な製糖工場で原料糖分蜜糖に加工され、年間7000トン以上が専用の船で本土の精製工場に向けて出荷されています。伝統的な黒糖

の製造は家内工業的に小規模におこなわれていました。

### 砂糖地獄

喜界島では、9〜15世紀にかけて大陸との交易を営む南西諸島最大規模の集落があったと言われていますが、1446年に琉球王国により征服され、1609年に島津氏による奄美諸島・琉球侵略により薩摩藩の支配下となりました。1596〜1615年頃に中国福建省からサトウキビが持ち込まれ、その後1690年頃に琉球より栽培方法や砂糖の製造技術が伝えられたと言われています。1695年には藩の管理下で、島の代官所に「黍検者」が配置され、サトウキビの単一栽培と砂糖への経済の依存が進んでいきました。

薩摩藩は侵略当初、自立小農民の育成を図っていましたが、幕府の命による木曾川の治水工事や藩主の乱費による財政難が続くなか、高値で取引される黒糖に目をつけ、年貢米を砂糖に変える「換糖上納制」の導入(1745年)や、砂糖の専売制度「砂糖総買入れ制」を導入(1777年)し、黒糖を全て藩に上納させる取り立ての仕組みを作り上げました。この制度の下、喜界島・奄美大島・徳之島の三島民にサトウキビの栽培を強制して砂糖を製造させ、年貢として上納した砂糖の残りの黒糖の販売も禁止し、藩が全て買い上げ、島民にはその対価を金銭でなく米や日用品で支給しました。島民に不利な換算率や、役人による支給のごまか



しも多く、生産者は二重、三重に搾取されていきました。

不作や、病気などで課せられた年貢を納めることができない生産者の多くは、裕福な大農家から黒糖を借りて年貢を納めましたが、債務を返すことができず、豪農に土地を差し出し身売りをして家人と呼ばれる債務奴隷となりました。藩が大農家へ氏族身分を付与したこともあり、多数の家人を有する大農家による富の拡大再生産と島民の代理支配という構図が作り出されていきました。

五百万両という莫大な債務を抱えていた藩は「天保改革」と呼ばれる財政再建策のもと、三島からの黒糖の取り立てをさらに強化し、三島では「ソテツ地獄」と呼ばれる飢餓が繰り返され、徳之島では一度に3000人が餓死する事態も発生しました。1868年の明治維新により薩摩藩による圧政は終わり、1873年に大蔵省から黒糖自由売買の通達が出されましたが、生産者の窮状は変わらず、



（写真上）島村さん、お世話になった工房の皆さんと。前列左から2人目がステーブさん。後列右がアイクさん。  
（写真下）喜界島のサトウキビ畑。

【参考文献】  
公益社団法人鹿児島県糖業振興協会(2016)『鹿児島県における平成27年産サトウキビの生産状況および実績について』  
名越謙(2009)『奄美の債務奴隷ヤンチュ』株式会社南方出版社  
原井一郎(2005)『甘い砂糖 丸田南里と奄美自由解放運動』高城書房  
弓削政己(2009)『奄美諸島歴史入門』、『ホライゾンVol.30』ホライゾン編集室

## マスコバド糖生産者の自立への旅路

### ―ダマ農園の場合―

幕田恵美子／まくだ・えみこ  
（オオルター・トレードジャパン広報本部）

マスコバド糖の産地のひとつであるダマ農園は、もともと1973年に地主ダマ・チュウによって開かれ、ネグロス北部や南部、パナイ島のアンティケ州などから労働者が集められて荒地の開拓から始まりました。農園労働者の仕事は、8月〜5月にサトウキビの刈り取りとトラクタへの積み込み、次の作付けや草取り、肥料まきでした。80年代半ばに起こった「砂糖危機」の時には、ダマ農園は閉鎖には至りませんでした。労働者の状況は厳しくなり、状況改善を要求する労働者に対して、地主は暴力を使って脅迫してきました。88年にフィリピン政府が包括的農地改革法(CARL)を施行すると、サトウキビ作付地も農地改革

の対象となったため、ダマ農園の地主は、サトウキビの代わりにマホガニーやパイナップルの生産へと切り替え、農地改革から逃れようとした。地主からの暴力に対して、労働者たちは辛抱強く、法律にのっとった裁判所での闘争に徹しました。

### 自分たちのための生産ができるようになった

2003年、農地改革のもと、元労働者たちは、78ヘクタールの土地を手に入れました。自分たちのために土地を耕せるようになった元労働者たちは、作付け計画をつくり、メンバーが220ペソずつ出し合って初めての作付けが実現しました。同年、オオルター・トレード社(ATC)と出会い、ATCが進めていたサトウキビの有機栽培プログラムに取り組み、翌04年にマスコバド糖用のサトウキビとしてATCに出荷。サトウキビの売上はすべて生産者たちのものとなり、地主から解放された喜びを実感しました。07年には有機

認定とフェアトレード認定を取得しています。

### 自立した「コミュニティ」への取り組み

ダマ農園の生産者たちは、サトウキビの生産性向上のための取り組みに加えて、コミュニティの自立について自分たちで話し合い、「コミュニティ開発計画」をつくるようになりました。サトウキビ以外に米の生産に取り組み、今ではメンバーの家族分は自給し、余剰分を販売できるようになりました。行政や海外パートナーからの支援プロジェクトとつなげて、野菜づくり、養鶏、精米所、養殖、有機堆肥づくりなど、さまざまなプロジェクトに取り組みんでいます。

ダマ生産者協会委員長のダニエルさんは次のように語っています。「自分たちの力をつけていく道には、かつてのダマ農園のようにたくさん石がごろごろしていました。私たちは、仲間力を結集して少しずつその石を取り除いてきました。まだまだ長い道のりですが、私たちは協力しあいながら、この旅を続けていきます。」



ダマ農園の生産者協会DAFWARBAによる米の脱穀作業。



ダマ農園の養殖池にて。



ダニエル委員長。

### ジョネルの恋人探し!?

寺田 俊／てらだ・しゅん  
APLA事務局

世界各国どこでも若者が集まれば盛り上がるのが恋愛話!?

2017年4月、フィリピンとラオスの若手農民が交流のために東ティモールを訪れた際に、現在恋人のいないネグロスのジョネルに対して、東ティモールの仲間から「結婚相手を見つけるために東ティモールに残ればいいよ!」「(東ティモール農民で同じく恋人のいない)マルクスと交換しよう!」と愛のあるからかいの言葉が投げかけられる場面も。ジョネルも「東ティモールは美人が多い。残ってもよいかも……」と満更ではない模



農民交流に参加するジョネル。

様でした。

閑話休題。人びとが集まり音楽がなりだせば、自然と輪になり踊り出す。東南アジアの国々ではよくあることです。東ティモールでは、それを「テベ」と呼び、精神的つながりを深める大切な方法です。コーヒー産地の村を訪問したフィリピンとラオスの農民たちも、村の人に迎え入れられて「テベ」を踏むことに。手を取り合い、みんなで大きな輪を作って、大地を踏みならします。盛り上がってくると、一人が輪の中央に飛び出して、自分の踊りを披露します。満足したら次の人へバトンタッチ。もちろんラオスとフィリピンの農民にも順番は回ってきます。見様見真似で中央に出て、ひと踊りして次の人と交代します。そしてジョネルの番がやってきました。実は、極度の恥ずかしがり屋のジョネル。人前で何かをすることが苦手な彼は「やだやだー」と言って、しまいに輪から飛び出して、走って逃げてしまいました。その時、東ティモールのお母さんたちから一言。「こりゃ、ここでは恋人は見つけれないわ……」。

こんなことがあったんです!  
スタッフが語る出張こぼれ話

# ひろつくとゆうこの 百姓の100章

A Farmer have One Hundred Stories.



齋藤博嗣&裕子 / さいとう・ひろつぐ&ゆうこ  
—反百姓「じねん道」



「じねん道」実践中の「農的ワークライフバランス」は、家庭で自給自足を心掛け、仕事と生活、家族、自然(命あるもの)との距離を縮め、縦横無尽に協力しあえる関係性を大切に、究極の働き方改革です。(「のら」農文協提供・松久 章子さん撮影)

第7章 「家族農たえ小さく見ゆるとも世界の未来今」にある「農的ワークライフバランス」新しい家族農」の可能性

第6章に続き、「国際家族農業年(YFF)」その2です。家族農業の可能性を再評価し、支援するための国際的な啓発活動2014年のYFF後も、成果をさらに広げるために、世界各国・地域では、国連総会で10年間延長の採択を求める「YFF+10」キャンペーンが続いています。日本では、2017年6月に「家族農業ネットワーク・ジャパNFUN」(Family Farming Network Japan)という新しいサポート組織を設立し、「じねん道」も夫婦で呼びかけ人のメンバーになりました。あらゆる人の暮らしに深く関連する「農」は、世界のさまざまな危機と表裏一体です。私たちの先生、自然農法の創始者・福岡正信さんは、1988年にアジアのノーベル賞「マクサイサイ賞」を「世界中の小農民」

2016・30年の中でも、家族農業の役割が重要であると位置付けられました。「家族農」のあり方は、農業の問題にとどまらず、人間、社会、地球環境の関係性崩壊によって生じる現代社会の希薄化にも通じています。現在と将来の世代のために、生き方のベースに農を置く、農的ワークライフバランスを「新しい家族農の可能性として、私たちは夫婦で子どもたちと共に実践していきます。

※「反百姓「じねん道」自家採種のタネは、APLASHOで購入できます。

1 994年オルター・トレード社(ATC)に入社して最初の仕事で、サトウキビの原料管理でした。長年マスコバド糖の仕事をしてきたウヤ師匠と一緒に、サトウキビの品種、熟度、手入れ、管理作業に関する基準をつくりました。その後、新しいマスコバド糖製糖工場(ATMC)ができて、97年に工場の管理責任者となりました。当時の工場労働者は主に軍事化の犠牲者や労働組合員・農民活動家たちで、物申す彼らをまとめながらマスコバド糖の製造工程を標準化する仕事はなかなか大変なことでした。99年に、マスコバド糖品質管理部長となり、まずはマスコバド糖の製造工程を化学的に分析できるように検査室の設置をしました。

## 品質クレームに向き合って

日本の消費者から様々なクレームが届きますが、消費者には品質や食品の安全を要求する権利があり、生産者はそれに応える義務があると考えています。ただ、改善の努力をしているにもかかわらず同じクレームが続くともどかしい気持ちになります。予算がなくてすぐに対処できなかったり、品質に関するフィードバックの文化的な捉え方があったりと、理由は様々



## インタビュー◎マスコバド糖品質改善の歩み

### マスコバド糖製糖工場長 アーネル・リガホンさん(愛称 スティーブ)

Arnel Ligahon

マスコバド糖が日本に届きはじめて30年前、「商品」と呼べるものではなかったとは、当時の語り草になっています。しかし、今や品質面、製造管理面において、認証を取得したり表彰されるほどに成長しました。それは「日本の消費者との二人三脚の成果」と語るのは、現マスコバド糖製糖工場長のスティーブ・リガホンさん。30年間の品質改善の歩みを伺いました。(聞き手・まとめ: 幕田恵美子/まぐた・えみこ ATJ広報本部)



↑ 初代のマスコバド糖製糖工場(1987年~)。掘っ建て小屋に近い形から始まりました。



→ 工場が建てられ、壁や窓ができました(1993年~)。



現在の工場。2006年にリニューアル。設備も改善され、製造管理も行き届くようになりました。

ののですが……。しかしながら、オルター・トレード・ジャパン(ATJ)のスタッフや生協、メーカー関係者が工場に来て一緒に解決策を考えてくれたことは、品質づくりに大きく貢献していると思っています。

## 消費者へつとめて……

生協の組合員がコーヒーにマスコバド糖を入れて飲んだところ、カップの底に何か残ると調べると、異物が入っていることが判明。生協から網戸をプレゼントされたのが消費者の皆さんから

の最初の協力でした。フィリピンのどこにでも現れるヤモリ問題の解決策はハードルが高かったです。ヤモリが入ってきそうな入口はすべて封鎖したにもかかわらず、天井に貼り付いているのです。最終的には釜と乾燥台の上部に布を張りました。ヤモリが誤って天井から落ちた場合に、マスコバド糖に混入するのを防ぐ最後の砦としたのです(現在は閉鎖型釜の使用と乾燥室の密閉が可能となりました)。針金が混入した時には「篩を針金ではなく細かい穴の空いた板で作ったらどうだ」という生協職員の発

想には感服したものです。最近も、日本の喜界島の小規模製糖工場との交流を経て、多くを学びながら、更なる改善は続いています。最後に、消費者の皆さんにマスコバド糖を食べるときに思い出していただきたいことがあります。「飢餓の子どもを抱えた力のないサトウキビ農園労働者が、自分で耕せる土地を得て、そこで生きるための力をつけてきた。それをマスコバド糖という形で日本の皆さまに支えていただいている物語」なのです。

## Have you ever seen the Cinema? あの映画を見たかい? — 07

### 『百円の恋』(2014年、日本)

【監督】武正晴 【出演】安藤サクラ、新井浩文、沖田裕樹



『百円の恋』発売元:東映ビデオ 価格:3800円(税別)

無職でひきこもり、長年親許でひとすだらしない生活を送る齋藤一子(32歳)。妹と大ゲンカの末、ついに実家を追い出される。やむなく初めての一人暮らし。そして百円均一のコンビニで深夜のアルバイトに就く。そんな一子がボクシングに出会い、次第に戦う女に変貌していく……。

主役のスーパータメ人間・一子の覚醒と成長、挑戦の物語は楽しいがここで取り上げるのは彼女が働く百円コンビニ店の店長の男。店長といっても店のオーナーではなく、コンビニ二チエーンを展開する会社の社員。典型的な「名ばかり管理職」である。店で働く正社員はただ一人。慢性的な人手不足、しょうもないアルバイト従業員、訳のわからない客、会社からの圧力、ゆえに長時間&過重労働、極度の寝不足。就労環境は劣悪で、そのストレスは凄まじい。

最初の店長はついに鬱病を患い、倒れ、その挙句クビ(=使い棄)で。次の店長(推定30歳代後半・男)も消耗していつかいつか。神経はささく

## ダメ女は覚醒、変貌したが……

れだち、目はうつろ。常にツツツツ独り言(愚痴、不満)をつぶやきながら働いている。傍目から見れば、そんなとこ辞めればいいのに……と思うが、彼は辞めない、辞められない。就職氷河期世代のこの男は正社員の職を得るための苦渋を嫌というほど体験しているだろう。そして30代半ばを過ぎるとよほどの知識や技術もしくは有力なコネがない限りより良い転職はさらに難しい。彼には妻と子どももいる。「男の活券」もあるだろう。まともな思考が壊れている(壊されている)のかもしれない。

会社はそれを熟知しているから正社員身分をエサに非人道的で無茶な働き方を強いることができる。長時間過重労働のみならず低い労働生産性、低賃金、身分格差、種々の差別(性差別、年齢差別等々)……、日本全労働者への依存度の拡大、AIの進化……、これらが相まって変化を恐れ、正社員の既得権益にしがみついている場合ではない。

# 東日本土壌汚染マップと 私たちが向き合うべきこと

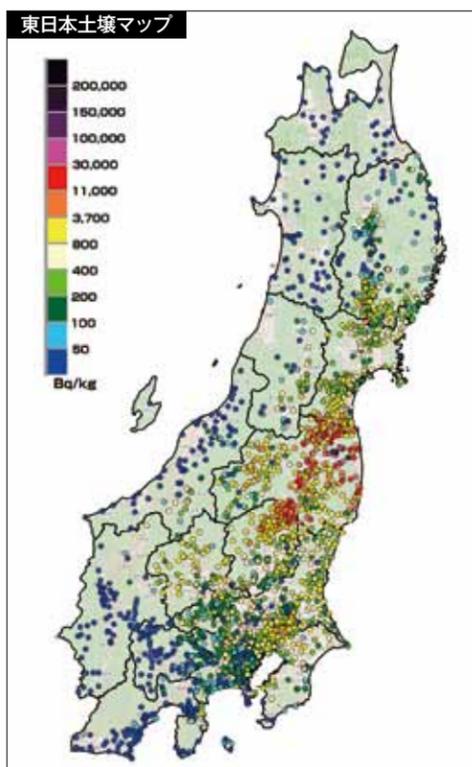
石丸偉丈／いしまる・ひでたけ  
みんなのデータサイト事務局長

**全**国34の市民測定室が協力し、放射能測定データを結合して検索できるようにしている「みんなのデータサイト」という取り組みがあります。私はその会の事務局を務め、仲間と共に、食品や土壌の測定を進め、情報公開をしてきました。

2014年秋より「東日本土壌ベクレル測定プロジェクト」(通称「土壌プロジェクト」)を始めました。北は青森から南は長野、静岡まで、東日本17都県という広範囲にわたって一定の手法で土壌を採取し、汚染度をマップ化していくというかなり大掛かりな取り組みです。これは岩手の市民グループが、自分たちの地域の土壌汚染調査をし、行政に対処や健康調査を求めた取り組みを雛形として、東日本を広くカバーする調査として私たちが拡大させたものです。

## 汚染をなかつたことに させないために

チェルノブイリ事故では、最大の汚染を受けたベラルーシとウクライナでは、



汚染状況を丁寧に把握し、これからも長く対処していかなければならない。

〈東日本土壌ベクレル測定プロジェクト〉  
<http://www.minnanods.net/soil/>  
※「土壌プロジェクト」で検索できます。

自国の国土の汚染状況を詳細に把握し、対策のため土壌汚染度の調査を実施しました。避難基準や保養実施、各種補償の線引きを、空間線量だけでなく土壌汚染の数値も使ったのです。それは事故の5年後に制定された「チェルノブイリ法」において規定されています。一方で日本の状況を見ると、事故後6年経ちますが、未だに「年間20mSv」という非常に高い数値を基準とし、補償段階を細かく定めておらず、補償打ち切りを加速させている問題があります。ベラルーシやウクライナは、国が土壌調査をおこないました。しかし、日本では国で、航空機モニタリングで空からざっくりと調査はしましたが、土壌を各地で採取し測定するという厳密な取り組みはしていません。そこで、私たちは意を決し、「汚染をなかつたことにはさせない」との思いで、大変手のかかる土壌調査を市民力でやってきました。最初は岩手のデータ300件余りから出発し、今は3100件を超えるデータが登録されるに至っています。これは非常に貴重なデータですから、ぜひ多くの皆様にご覧いただきたいです(ウェブサイト参照)。

## 土壌調査で汚染度が一目瞭然

土壌調査は手法の統一が肝となります。文科省でもチェルノブイリでも、地表から5cmまでの深度で土壌を採取し、測定していますが、それにより各地の汚染の

比較が一定程度可能となります。私たちも同じ深度で採取しました。もちろん、同じ地域内でも常に同じ汚染度を示すとは限りませんが、完全な比較は難しいのですが、できあがってきた地図を見るとやはり汚染度がしつかりと浮き彫りになります。様々な地域の汚染度が色で表示され、福島県内でも濃度の高低差は大きく、また福島県外でも様々な地域が汚染を受けたことが見て取れます。

単純な土壌汚染度のみでの話だと、ベラルーシやウクライナでは強制移住すべき汚染度や避難に対して補償がなされる地域に、今も多くの方が補償もなく住み続けており、このままでよいのか問われます。2017年3月末には、区域外避難者の方々への住宅手当打ち切りもあり、補償を受けていない避難者の方々は更に厳しい現実にとらされています。

福島県民健康調査では、約30万人の子どもたちのうち190人余りがガン・ガン疑いとなっています。全てが事故由来とは言いつてもいいですが、全て事故由来とは言いつてもいいとはいえ、放射能は見えず臭わず、測らないとわかりません。それをいいことに事故がなかったかのように見える取り組みが進められています。測定をすると、土壌汚染状況はよく見えてきます。私たちのマップも一助となり、チェルノブイリ法のような詳細な線引きと補償がされることを願ってやみません。

# 地域の資源や元来の知恵を生かすことから

エゴ・レモス／Ego Lemos  
環境活動家、ミュージシャン

聞き手・まとめ 野川未央／のがわみお

**子**どものころは古い森がたくさんあふれていた。大人になる頃にはその森が消えてしまった。小川の水は枯れ、大地は乾ききっている。これから来る時代のこと、わからない。人はさらに罪を重ね、この大地で生きていくことは難しくなるかもこれなご」(SASIN BARAI 大地の証人)

そう歌うのは、東ティモールのミュージシャンであり、環境活動家でもあるエゴ・レモスさんです。歌のような未来を子どもたち・孫たちの世代に手渡さないように、東ティモール各地の住民と一緒に、地域の森や水源を生き返らせるための活動を続けてきたエゴさん。最近では、教育省のアドバイザーとして、国内全ての公立小学校での「学校菜園(エディブル・スクールヤード)」の設置、菜園をつかった総合的な教育の実践のための指導に注力しています。その背景にある思いを聞きました。

## 学校から地域に

東ティモールが独立して15年が経ちました



先生や生徒たちと一緒に学校の菜園作りに励む。

が、この間、様々な課題に直面しています。ひとつは環境の悪化、もうひとつは栄養不良の子どもの割合がとて高いことです。そうした状況下で、2013年から教育改革の一環で公立小学校のカリキュラムを書き換えるチームに加わることになり、パーマカルチャーの理念にもとづいた学校菜園プログラムを入れ込むことができました。

学校菜園の取組みの大きな意味は、生きた実験室が各学校にできることです。先生たちが、教科書だけに頼ることなく、言語、算数、芸術、科学、栄養、環境などを学校菜園で教えることができるのです。

もうひとつの重要な目的は、子どもたちが学校菜園で学んだことが地域に広がることです。家に持ち帰って、お父さんやお母さんにも伝えて、一緒に実践する

## 人びとの自然との絆を

ようになることを期待しています。この活動を5年、10年と続けていけば、東ティモールの子どもたちの栄養不良・栄養失調は確実に減らせると信じています。そして、各学校には、苗場も設置することになっていくので、そこで育てた苗を子どもたちが学校の周りに植えたり、家に持って帰って植えたりすれば、山や森が壊れていくという環境の問題も解決できるはずですよ。

小さな島である東ティモールでは、水問題は非常に深刻で、各地の水源がかなり涸れはじめています。けれども、政府や国際援助機関は、タンクを設置し、そこからパイプを引いて集落に流すというようなインフラ設備に多額の資金を投入しています。十数年に渡り各地の状況を見てきているエゴさんが、水源そのものの保全に取り組んでいる援助プログラムはほぼ皆無です。そうであれば、自分たちでやるしかない、と2005年に Permatani で水源保全の取り組みを始め、各地で活動を続けています。2013年からは、AP LA からも相談を受けて、エルメラ県で

も同様の活動を実施しています。エルメラは、山の上の地域でコーヒーの木は沢山ありますが、それでも水の問題に直面しています。多くの山の水源、湧水が枯れつつあるのが現状なのです。水源を生き返らせ、守るためには、地域の人びとの意識を変えることが重要です。地域の慣習的な方法で水の守り神に感謝を捧げること、住民自身が身体を動かして水源を保全することが可能になります。私が仲間と一緒に地域に入っている最初にするのは、伝統的な知恵を持っている長老たちを呼んで話を聞いて、彼ら自身も地域の人びとからたくさん知恵を学んでいます。

私の夢のひとつは、この仕事を続けることで、いつか東ティモール中の村で水が涸れることがないようにすることです。タンクやパイプを設置するような巨額の費用はかからないし、メンテナンスもそれほど大変ではありません。一番重要だと思えるのは、地域にある天然資源や元来の知恵を生かし、高めていって、人びとと自然との強い絆をつくりながら、地域をよくしていくということなのです。

(注1)人権にわたる恒久的持続可能な環境をつくり出すためのデータインテグレーション(家々の)とアグリカルチャー(農業)そして、パーマネットとカルチャー(文化)から導かれた言葉

(注2)エゴ・レモスさんが設立したNGO、パーマカルチャーをベースに、東ティモールにおける持続可能な農業の実践を広げるために、農民や青年を対象にしたトレーニングなどを実施している。

今号からのリニューアルを機に、思い切った全面カラーになった「ハリーナ」。いかがでしたでしょうか。これまで、掲載する写真がカラーだったらよいのに……と思うことが多く、今号から写真も合わせて楽しんでもいただけたらと思います。

今年で30周年を迎えたマスコパド糖。改めてマスコパド糖の魅力を再認識している今日この頃ですが、甘味だけではなく、旨みも引き出す砂糖で、可能性は無量大！ いずれ、新コーナー「キッチンあぶら」でも紹介できたらと思っています。(吉澤)

2週間の東ティモール出張から東京に戻って、締め切っていた自宅の暑さにびくり。室内の温度計は40℃を示しており、慌てて窓を開け放ったものの気温は一向に下がりません。赤道直下の東ティモールの方が圧倒的に涼しく(今は乾季なのでカラッとしますし、標高の高いコーヒー産地は朝晩肌寒いほどです)、このままトンボ帰りしたいなんて思ってみたり……。

さて、全面カラーにリニューアルした「ハリーナ」、いかがでしたでしょうか。裏表紙でスタートした「キッチンあぶら」は、昨年都内で開催して大好評だった「友産友消のススメ」というイベントが元になって生まれました。紙面でレシピをお伝えすることで、イベントに参加できなかった方にも民衆交易の食材をさらに楽しんでもいただければ幸いです。(野川)

# ハリーナ HALINA

2017年8月号 vol.02-no.37  
2017年8月1日発行

【編集者】  
吉澤真満子  
野川未央

【表紙写真】  
長倉徳生

【デザイン制作】  
十年舎

【編集・発行】  
特定非営利活動法人 APLA  
(APLA/あぶら: Alternative People's Linkage in Asia)  
〒169-0072  
東京都新宿区大久保2-4-15  
サンライズ新宿3F  
(tel.) 03-5273-8160  
(fax.) 03-5273-8667  
(e-mail) info@apla.jp  
(URL) http://www.apla.jp

【印刷】  
株式会社ミック

## 事務局だより

### 事務局の動き (2017年5月～2017年7月)

- 5月 14日 ISOGOワールドパークに出店しました。
- 5月 15日 立教大学で野川が講演しました。
- 5月 19日 エゴ・レモスさんと東京都多摩市立愛和小学校を訪問しました。
- 5月 20日 東ティモール・フェスタ2017に出店しました。
- 5月 20日 日消連主催シンポジウム「土に生きる」に野川と寺田が登壇者として参加しました。
- 5月 22日 「APLA presents エゴ・レモスTalk&Live」を開催しました。
- 5月 26日 獨協大学で野川が授業をしました。
- 5月 27日 ロータス寺市に出店しました。
- 5月 28日 東京朝市アースデイマーケットに「PtoP」カフェとして出店しました。
- 6月 3日 第10回APLA総会を開催しました。
- 6月 11日 東京朝市アースデイマーケットに「PtoP」カフェとして出店しました。
- 6月 17日 100万人のキャンドルナイト2017@増上寺に出店しました。
- 6月 18日～25日 フィリピンへ秋山と寺田が出張しました(寺田は7月6日まで)。
- 6月 23日 日本農業経営大学校で吉澤が授業をしました。
- 6月 28日～7月 12日 東ティモールへ野川が出張しました。
- 7月 1日 長野県上田高等学校で吉澤が講演しました。
- 7月 11日 友産友消のススメ「夏の甘さの方程式」を開催しました。
- 7月 12日 パルシステム埼玉(蓮田・伊奈・白岡地区会)でコーヒーのワークショップを開催しました。
- 7月 15日 目白大学国際交流研究科第3回公開講演会で吉澤が講演しました。
- 7月 16日 東京朝市アースデイマーケットに「PtoP」カフェとして出店しました。
- 7月 20日、21日 福島県・バナナ募金届け先を訪問しました。(福島市2件、南相馬市1件)
- 7月 22日 グリーンコープ「青少年ネグロス体験ツアー」が開催され、評議員の大橋さんと寺田が同行しました。

### 事務局からお知らせ

#### APLA マンスリー募金スタート

APLAでは、新しいサポーター制度を導入し、新たに「マンスリーサポーター」と「APLAサポーター」を募集しています。ぜひ、知人の方へのお誘いをお願いします。リーフレットが必要な方には郵送いたしますので、事務局までご連絡ください。



#### 以下の呼びかけに賛同・協力しました。

- 共同声明：市民社会を抑圧する「共謀罪」法案に反対
- 経済連携協定に係る情報公開要求
- パレスチナ自治区における行政拘禁制度の廃止ならびに被拘禁者の即時釈放に関する嘆願書

★ハリーナのバックナンバー(前号分まで)は、APLAのウェブサイトでもご覧いただけます。  
<http://www.apla.jp/archives/publications-cat/halina>



5月に来日したエゴ・レモスさん、自らが東ティモールで普及している「学校菜園/エディブル・スクールヤード」の取組み(詳細は13頁を参照)についての学び合いのために、東京都多摩市立愛和小学校を訪問しました。愛和小学校では、ESDの推進に向けて、生活科・総合学習の時間を中心にカリキュラムを組み、エディブル・スクールヤードの活動を実践しており、今回の学校訪問と子どもたちとの交流は、小学校とエディブル授業の実践に協働している一般社団法人エディブル・スクールヤード・ジャパン(ESYJ)の皆さまの協力によって実現しました。当日は、午前中に1年生2ク



「大きいお芋を作りたい人は、苗を立てさせて植えてね。沢山お芋を作りたい人は、苗を寝かせて植えてね」とガーデニングリーダー。



ESYJのスタッフの皆さんと記念撮影。

### From East Timor 東ティモール エゴ・レモスさん、 愛和小学校を訪問

ラスのガーデニングクラスを視察させてもらいました。ESYJのスタッフ、ボランティアの皆さんが「ガーデニングリーダー」として、授業を進めていきます。1年生の「見つけよう、育てよう、お世話しよう」という学びのテーマに沿っての授業。この日は、これから育てて収穫まで面倒をみるサツマイモの苗植えがメインのプログラムでした。1クラスの子どもたちが苗を植えてい

る間、もう1クラスの子どもたちは、ガーデン(学校菜園)やその周辺の自然の中で、動植物を探し出す「ガーデニング」というプログラムを楽しみました。具体的な動植物だけでなく「いいにおい」や「くさいもの」と

いうビンゴのマスもあって、子どもたちは楽しそうに駆け回っていました。この間、2組はサツマイモの苗を植えていました。エゴさんは子どもや先生たちの様子を観察する傍らで、ガーデンの片隅にある堆肥づくりの箱を見つけて、ESYJの堀口代表に色々質問を投げかけます。最終的には、「学校の敷地内にある林から出る枯れ葉や草などの有機物と子どもたちが飼っている鶏の糞を上手に活用したら、簡単に菜園の土をもっと豊かにできるはず!自分たちも東ティモールでは、地域にあ

### From Nihonmatsu, Fukushima 福島県二本松市 二本松有機農業研究会 ソーラーシェアリングの 取り組み進捗報告

2016年9月から呼びかけが始まった福島県二本松有機農業研究会が取り組むソーラーシェアリングのパネル設置。APLAでは他団体と協力して「パネルサポーター」制度を設け、二本松市外の人でも応援できる仕組みを作っています。現在、パネル129枚分(全体で990枚必要/1千平方メートル、50坪)の

るもので土づくりをしているよ」とその方法を見せてくれました。東ティモールと日本では気候が違うので、すべて同じようにはいかないとは思いますが、ESYJの皆さんもエゴさんから大きなインスピレーションを得たようです。

今回の訪問をきっかけに、日本と東ティモールそれぞれの「学校菜園/エディブル・スクールヤード」の取組みがさらに前進しますように!(野川未央/APLA事務局)

注1) Education for Sustainable Development of 略: 持続可能な社会づくりの担い手を育む教育

支援金が集まっています。計画当初は2017年春にソーラーパネルの建設が予定されていましたが、融資の目処が6月になること、また農地転用申請が進まず、まだ建設にまで至っていません。農業委員会へ再三問い合わせ、夏には申請許可が下りる見通しです。今年の農繁期が終わる冬には建設を実現したいと、二本松有機農業研究会の皆さんからお便りをいただいています。(吉澤真満子/APLA事務局)

# KITCHEN APLA

## キッチンあぷら

Featuring **ゲランドの塩**

料理人が教える「ストーリーのある食材をより楽しむレシピ」

個性的な料理人たちに、民衆交易の食材を使って作ってもらったレシピをお届けします。

レシピ提供・料理

**按田優子** / あんだ・ゆうこ  
東京くらげ(※)



## 塩きんぴら 塩メレンゲをのせて

塩きんぴらに塩メレンゲを乗せ、刻んだ大葉(適量)を盛り付けて完成!  
しょっぱいメレンゲを銘々の加減で割り、一緒にいただきます。  
プルーンと大葉の意外な組み合わせもお楽しみください!

写真: 平河夏 (PHOTO LIEN ∞)

### 塩きんぴら

材料 (2人分)

ごぼう…1本 人参…1本 プルーン…10粒  
ゲランドの塩(細粒塩)…小さじ1  
オリーブオイル…大さじ1

作り方

- [1] ごぼうと人参を適当な長さに切った後、すりこぎで叩いて蓋つきの鍋に入れる。
- [2] [1]にオリーブオイルと塩をふり、蓋をして弱火で柔らかくなるまで蒸し煮する。プルーンを入れて、さらに5分くらい蒸し煮します。こうして根菜の甘みを引き出す。

### 塩メレンゲ

材料 (2人分)

卵白…1個分 ゲランドの塩(一番塩)…小さじ1  
片栗粉…大さじ1

作り方

- [1] ボウルに卵白を入れて泡立て器で泡立て、角がピンと立つくらいまでになったら、塩と片栗粉を加えて混ぜる。
- [2] 天板にオーブンシートを敷き、メレンゲを平らに伸ばす。100度のオーブンで20分くらい、カリカリになるまで焼く。



ゲランドの塩はオンラインショップ APLA SHOPにてご購入いただけます。  
写真は「ゲランドの塩 細粒塩500g」

<http://www.aplashop.jp/shop/>



(※)東京くらげとは…日本と世界の保存食、加工食が面白くて仕方ない料理人・按田優子と、そんな按田優子が面白くて仕方ない流しのエディター・しまぎみさこによる、骨なし無色透明な料理ユニット。

## ハリナ HALINA

2017年8月号 vol.02-no.37 2017年8月1日発行 頒価 300円(税込)

【編集・発行】

特定非営利活動法人 APLA (APLA/あぷら: Alternative People's Linkage in Asia)

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-15 サンライズ新宿3F  
(tel.) 03-5273-8160 (fax.) 03-5273-8667 (e-mail) info@apla.jp

(URL) <http://www.apla.jp>

### APLAの活動を応援してください。

月々500円からサポーターになって  
APLAとつながる!

APLAでは、会員(年会費5,000円)の他、新たにサポーター制度を導入し、「マンスリーサポーター」と「APLAサポーター」を募集しています。詳しくはwebsiteをご覧ください。リーフレットが必要な方には郵送いたします。

問い合わせ・お申し込み

APLA事務局にご連絡いただくか、下記のwebsiteからお申し込みください。QRコードからもアクセスできます。

<https://apla.secure.force.com/>

